

関東地方北東部における加曽利E式出現期の土器様相

塚本師也

はじめに

加曽利E式の成立に東北地方の大木8a式が関与したと言われてきた。栃木県北部は、加曽利E式と大木8a式の分布の接触地帯と言われ、加曽利E式の成立を考えるうえで重要な地域と考えられてきた。演者は、栃木・茨城県の中期前～中葉の土器編年を進め、阿玉台式終末後、土器群が大きく入れ代わり、小地域ごとに特徴的な土器が成立することを指摘した（塚本2016、2019）。

今回は、栃木・茨城県域を5つの地域に分け、加曽利E式成立前（阿玉台Ⅳ式期）から加曽利E式の磨消縄文出現以前（加曽利EⅠ式、加曽利EⅡ式まで）の土器群の変遷案を示し、東西関東の加曽利E式土器編年との対比と土器を介した交渉の有無を考える際の材料を提供することとしたい。

1 大木7b式および大木8a式の呼称について

栃木・茨城両県域北部の縄文時代中期前～中葉の土器は、関東地方の「阿玉台式」、「加曽利E式」と東北地方の「大木7b・8a・8b式」の型式名で呼ばれている。「阿玉台式」は千葉県香取市阿玉台貝塚の土器、「加曽利E式」は千葉県千葉市加曽利貝塚E地点の土器を標準として型式設定された。大木式は、宮城県七ヶ浜町大木圀貝塚で分層発掘した土器を標準とする仙台湾周辺の土器型式である。仙台湾周辺の「大木7b・8a式土器」と、突起の発達を特徴とする福島県会津・中通り地方から栃木・茨城両県北部で「大木7b・8a式」と呼ばれる土器は、共通点はあるが、異なる点が多い。型式設定者の山内清男が、加曽利E式の「最も古い部分」に並行するとした「大木8a式」を、現在多くの研究者が、阿玉台Ⅲ式まで範囲を遡らせている（「大木8a式古・中段階」等と呼ばれている。）。演者は仙台湾周辺より南の中期前～中葉の土器を「大木7b式」「大木8a式」の名称で呼ぶことを避け、形態や装飾が類似する土器群にそれぞれ名称を付け、阿玉台式や加曽利E式との並行関係で年代的な位置づけを把握してきた。

2 地域区分

栃木・茨城の県境に、八溝山地が南北に連なる（第1図）。その最南端が筑波山である。那珂川は、那須岳に源を発し、八溝山西麓に沿って南流し、八溝山地を横切って茨城県側に入り、平野部を東南流して、ひたちなか市と大洗町の間で太平洋に注いでいる。八溝山地西側の那須野が原台地（扇状地）周辺を「那珂川上流域」、那珂川が八溝山地を横断する東西両側を「那珂川中流域」、太平洋に近い平野部を「那珂川下流域」とする。八溝山地の西・南側が鬼怒川・小貝川流域である。鬼怒川は、帝釈山地の鬼怒沼に源を発し、栃木県中央部から茨城県南西部の平野を南流し、現在は茨城県守谷市で利根川に合流する。小貝川は栃木県東部の丘陵地帯を水源とし、現在は鬼怒川の東側をほぼ並行して南流し、茨城県利根町で利根川に合流する。これは近世以降の瀬替え工事の結果で、それ以前の両河川は、複雑に蛇行して現在の利根川下流域にあった香取の海に注いでいた。流域には、栃木県側に宝木台地、宝積寺台地、茨城県側に猿島台地、下妻台地、真壁台地、稲敷台地等が存在する。これらの台地は、下総台地と続いている。ここでは、便宜

的に栃木県側を「鬼怒川中流域・小貝川上流域」、茨城県側を「鬼怒川・小貝川下流域」とする。

3 研究の経緯

演者の加曽利E式初現期の土器の研究の経緯を記す。『日本先史土器図譜』以降、加曽利E I 式の東西差を指摘した動坂貝塚報文（安孫子 1978）、1980 年の神奈川考古シンポジウム（安孫子ほか 1980）を経て、埼玉県埋蔵文化財調査事業団が「縄文中期土器群の再編」（谷井彪ほか 1982）を発表する。ここで埼玉県花積貝塚 2A 号住居跡出土土器を、東西関東の加曽利E I 式古段階の共伴事例と捉えた。そこでこれに並行する栃木県、茨城県の土器を特定しようと考えた。阿玉台IV式土器を伴わない一括遺物に含まれること、キャリパー形の器形に一带の幅広い施文域を設け、そこに沈線を沿わせない隆帯で単位文を配す土器との共伴を手掛かりとした。栃木県では既に海老原郁雄による中期縄文土器編年が確立していた（海老原 1981）。海老原の編年は、系統の異なる土器群の交代によって年代差を捉えた完成度の高いものであった。演者は、同一系統の土器の変化の画期を捉えた編年が科学的と考え、海老原の編年を援用しなかった。

その後、浄法寺遺跡の報文を上梓し、栃木県北部の加曽利E I 式古段階は、「浄法寺類型」と呼ばれる土器が主体を占めることを認識した（塚本 1997）。これは海老原の編年の追認となる。また、中峠0地点型深鉢とクランク文を配す「下総台地型」の加曽利E式と勝坂式系土器の良好な組合せである茨城県西原遺跡第 61 号住居跡出土土器を実測する機会を得た（塚本 2010）。それまで漠然と、東関東の加曽利E I 式古段階には、クランク文を配す土器（縄文地文のもの、単沈線を充填する「下総台地型」）が主体を占めるであろうと考えていたが、むしろ中峠0地点型や勝坂式系の土器が主体となることを認識した。

その後、茨城県的那珂川下流域で宮後遺跡、中流域で滝ノ上遺跡等が調査され、加曽利E I 式古段階の地域差を把握した（塚本 2016）。

4 関東地方北東部の加曽利E I 式期の土器様相

演者は、加曽利E式の細別にローマ数字表記を用いる。加曽利E I 式は磨消縄文出現以前とする。対象とする地域は、南西関東地方で細分の基準とする頸部無文帯が発達しないため、これは使えない。沈線を沿わせない隆帯で口頸部に単位文を配す土器を「加曽利E I 式古段階」の指標、沈線が沿う単位文を配し、単位文が上下の区画と接する土器や短隆帯で上下の区画と連携する土器を「加曽利E I 式中段階」の指標、口頸部文様帯に渦巻文と区画文を交互に配す土器を「加曽利E I 式新段階」の指標とした。ここでは土器群が大きく変化する前の阿玉台IV式期の土器を合わせて4段階の変遷案を示す。

（1）那珂川上流域（土器図版は第2図）

阿玉台IV式期には、阿玉台IV式土器（1～3）、七郎内Ⅱ群土器（4）、槻沢型（5）と火炎系土器（8）が伴う。槻沢型や七郎内Ⅱ群土器の口縁に付く突起は立体化し、貼付隆帯で加飾している。

加曽利E I 式古段階には、阿玉台IV式期の土器群がほぼ消滅し、浄法寺類型（13・14）を主体に、火炎系土器（15）や口頸部に一带の施文域を配す貼付隆帯施文の土器（9・10）が伴う。中空突起は定型化し、加飾隆帯に沈線を沿わせるものが現れる。阿玉台式土器はほとんど残らない。

加曽利E I 式中段階は、引き続き浄法寺類型（22～24）が大きな割合を占め、火炎系土器が伴う。口頸部に沈線が沿う隆帯でS字文を配す土器（16）が出現する。突起が付くもの、胴部に曲線文を描く等大木

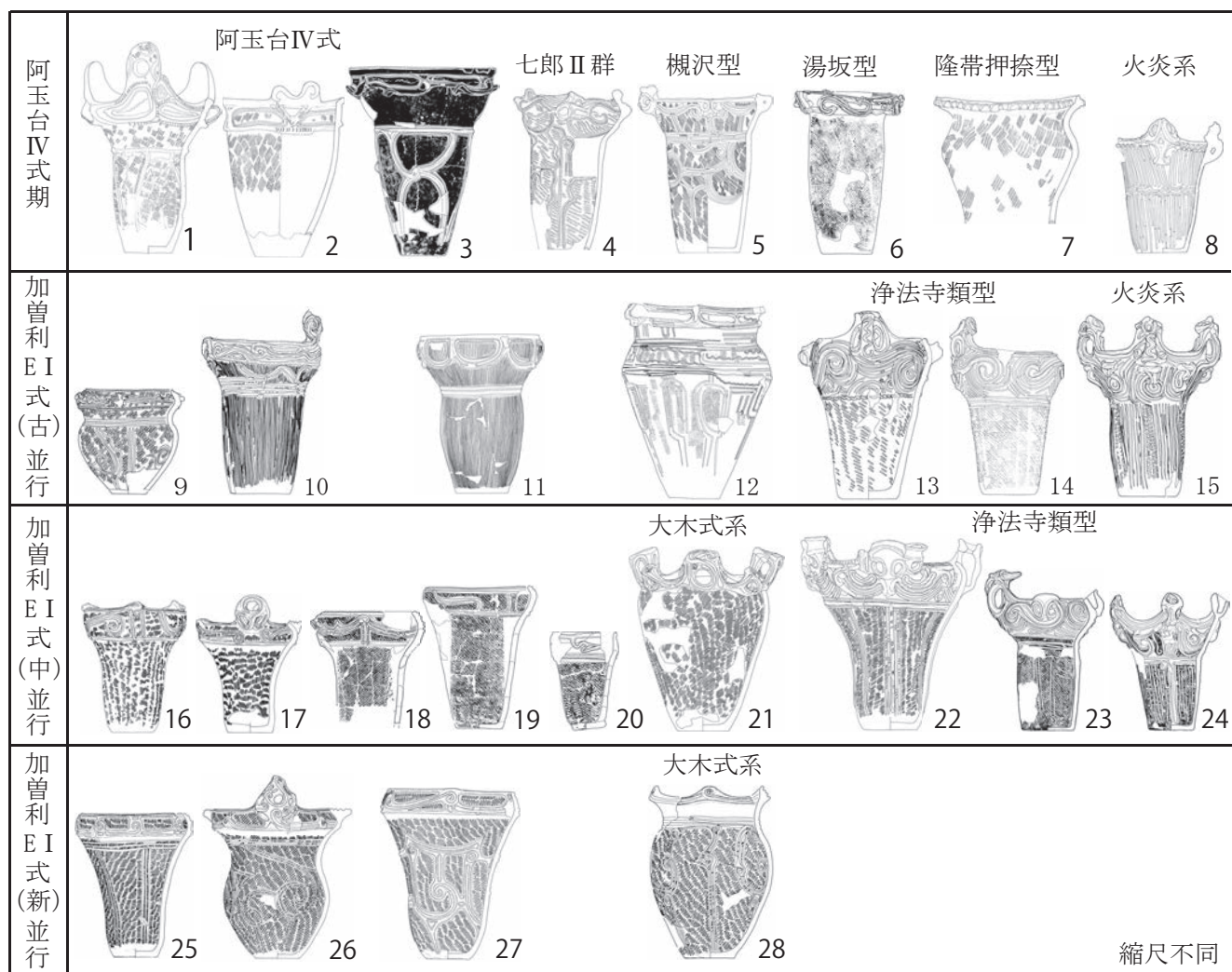


- | | | | | |
|-----------|-----------|----------|-----------|-----------|
| 1: 槻沢遺跡 | 2: 長者ヶ平遺跡 | 3: 岩舟台遺跡 | 4: 浄法寺遺跡 | 5: 三輪仲町遺跡 |
| 6: 小鍋前遺跡 | 7: 赤岩遺跡 | 8: 滝ノ上遺跡 | 9: 高ノ倉遺跡 | 10: 坪井上遺跡 |
| 11: 宮後遺跡 | 12: 上の原遺跡 | 13: 竹下遺跡 | 14: 島田遺跡 | 15: 寺野東遺跡 |
| 16: 松原北遺跡 | 17: 西原遺跡 | 18: 中台遺跡 | 19: 赤弥堂遺跡 | 20: 六十原遺跡 |
| 21: 東台遺跡 | 22: 下広岡遺跡 | 23: 陸平貝塚 | 24: 前田村遺跡 | |

第1図 関東地方北東部の地形と遺跡位置

式系土器の特徴を併せ持つものもある。突起はより定型化し、隆帯による加飾ではなく、中空突起の孔に沿って沈線を施す。大木8b式に類似する土器(20・21)が伴う。下総台地型がわずかに存在する。

加曽利E I式新段階は、口頸部に渦巻文と区画文を交互に配す土器(25～27)が主体となる。浄法寺類型や火炎系土器はほぼなくなる。突起は減るが、大形の箱状突起がある。大木8b式類似土器(28)が伴う。



1・2・4・5・7・8・10・25～28：槻沢遺跡 3・6：小鍋前遺跡 11：長者ヶ平遺跡
9・13・15～17・21・22：三輪仲町遺跡 12・14：浄法寺遺跡 18～20・23・24：岩舟台遺跡

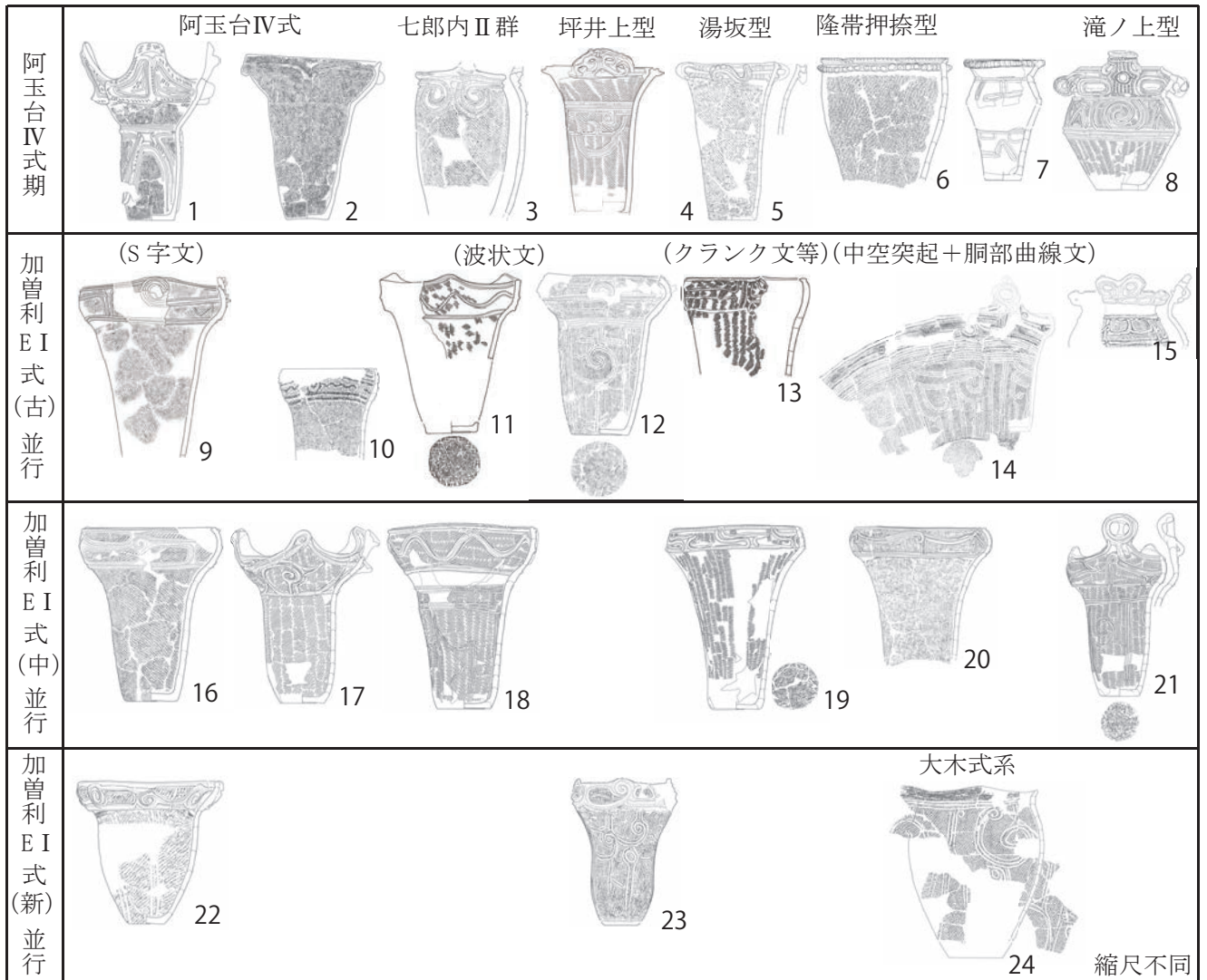
第2図 那珂川上流域（那須地方）の縄文時代中期中葉の土器群

（2）那珂川中流域（土器図版は第3図）

阿玉台IV式期は、阿玉台IV式土器（1・2）と七郎内II群土器（3）、坪井上型（4）等が伴出する。八溝山地より東側の茨城県側は火炎系土器が低調である。滝ノ上遺跡では、滝ノ上型（8）等独自の土器が存在する。中峠式土器はごく僅かな存在である。那珂川下流域や茨城県北部の海岸地域にみられる、宮後タイプ（スワタイプ）や交互刺突文の土器はほとんどみられない。

加曽利E I式古段階は、阿玉台IV式土器や坪井上型がほぼ消滅し、七郎内II群土器は姿を消す。口頸部の一帯の施文域に貼付隆帯で波状文や渦巻文を配し、中空突起を付け、胴部に曲線文を描く土器（14）が出現する。本地域を代表する土器といえる。また、貼付隆帯による波状文の土器（10～12）も目立つ。中峠式土器や下総台地型はごく僅かな存在である。浄法寺類型や火炎系土器は八溝山地以东にはほとんどない。

加曽利E I式中段階は、口頸部に沈線が沿う隆帯でS字文を配す土器（16・17）が出現し、突起が付くもの、胴部の曲線文等大木式系土器の特徴を併せ持つものもある。口頸部の文様には、クランク文（19）、

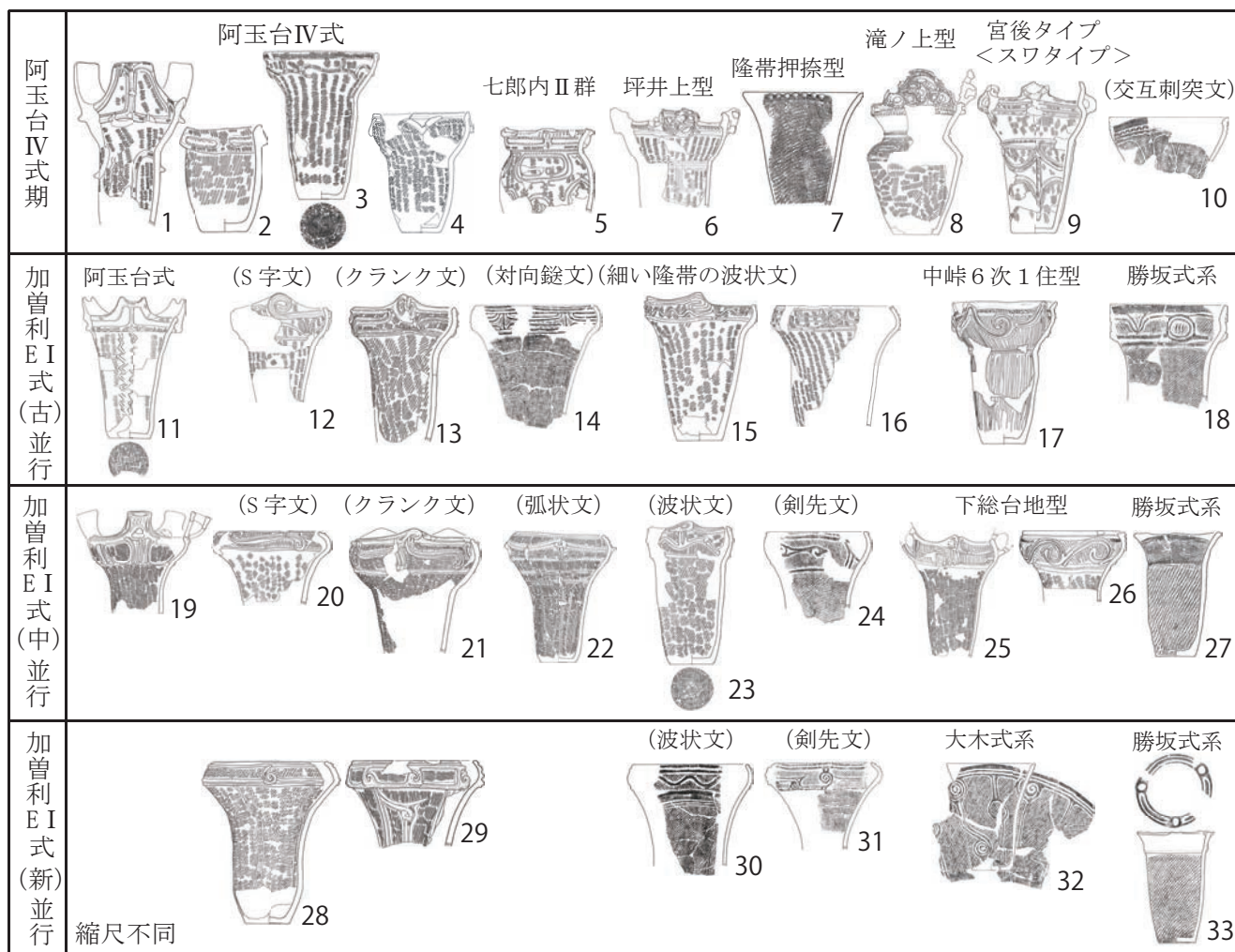


1・2：赤岩遺跡 3・5～10・12・14～24：滝ノ上遺跡 4：坪井上遺跡 11・13：高ノ倉遺跡

第3図 那珂川中流域の縄文時代中期中葉の土器群

波状文(18)、弧状文(20)もある。浄法寺類型、火炎系はほとんど出土せず、阿玉台式が僅かに残る。

加曽利E I式新段階は、口頸部文様帯に渦巻文と区画文を交互に繰り返す土器(22・23)に代表される。大木8b式に類似する土器(24)も存在する。



全て宮後遺跡

第4図 那珂川下流域の縄文時代中期中葉の土器群

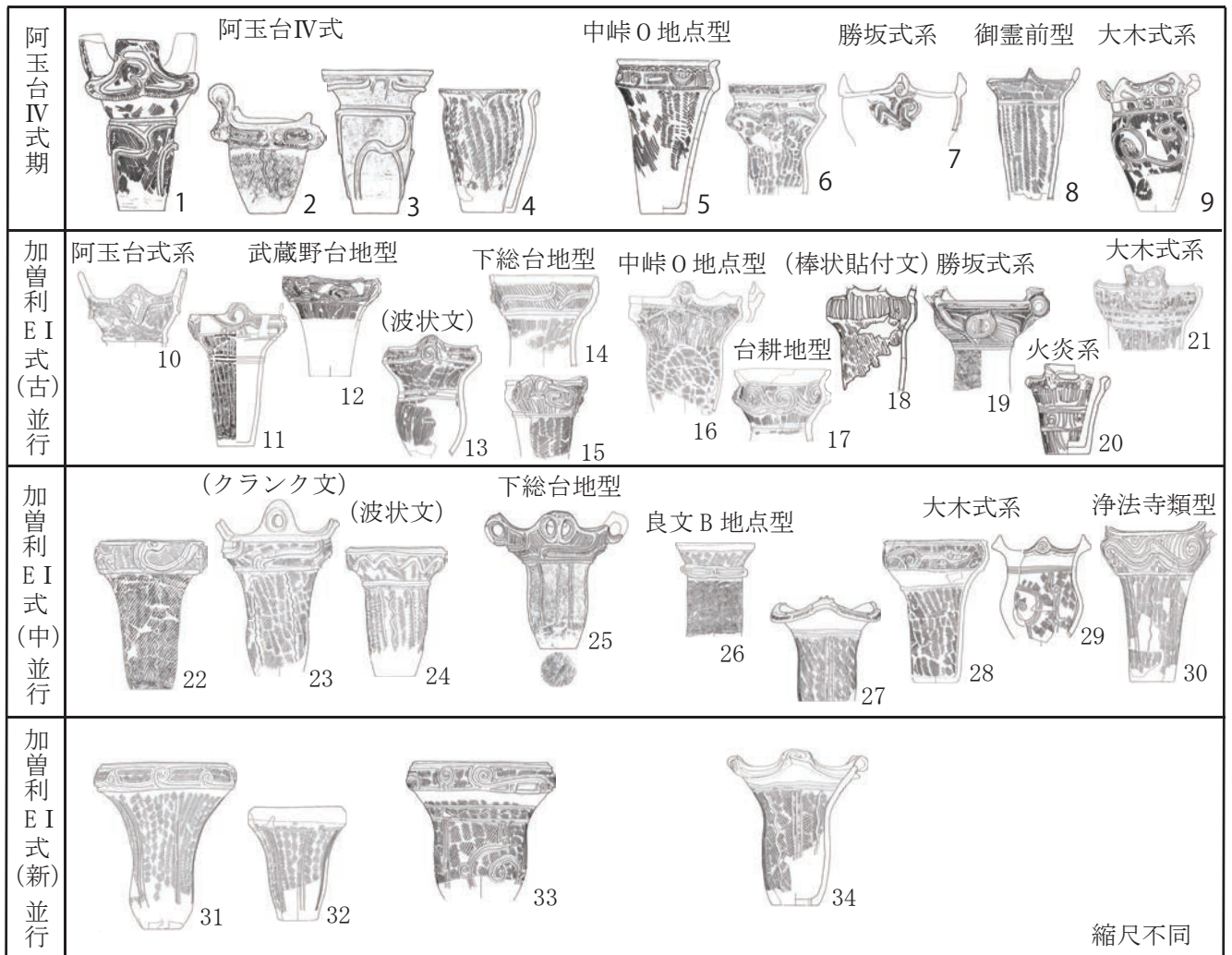
(3) 那珂川下流域 (土器図版は第4図)

阿玉台IV式期は、阿玉台IV式土器(1～4)、七郎内II群土器(5)、坪井上型(6)及び海岸部に多い宮後タイプ(スワタイプ)(9)と交互刺突文の土器(10)が伴う。中峠式土器は存在するが、あまり多くはない。

加曽利E I式古段階は、口頸部の一帯の施文域に、細い貼付隆帯による波状文(15)、渦巻文やカスガイ文を配す土器(13・14・16)が特徴的である。那珂川上・中流域と比べて突起は低調である。S字文の土器(12)、勝坂式系の土器(18)もある。阿玉台式土器(11)が僅かに残存する。

加曽利E I式中段階は、那珂川中流域同様に、口頸部の一帯の施文域に、沈線が沿う隆帯でS字文(20)、クランク文(21)、波状文(23)、弧状文(22)を配す土器が存在する。突起は低調である。下総台地型の加曽利E式土器(25・26)や勝坂式系土器(27)も多くはないが存在する。

加曽利E I式新段階は、口頸部文様帯に渦巻文と区画文を交互に配す土器(28・29)に代表される。



1・5・7・9・12：御城田遺跡 2・3・8・25：御霊前遺跡 4：竹下遺跡 11・19：上の原遺跡
 6・10・13～17・21・23・28・33・34：寺野東遺跡 22・24・26・27・29～32：島田遺跡
 18：松原北遺跡 20：高尾神遺跡

第5図 鬼怒川中流域・小貝川上流域の縄文時代中期中葉の土器群

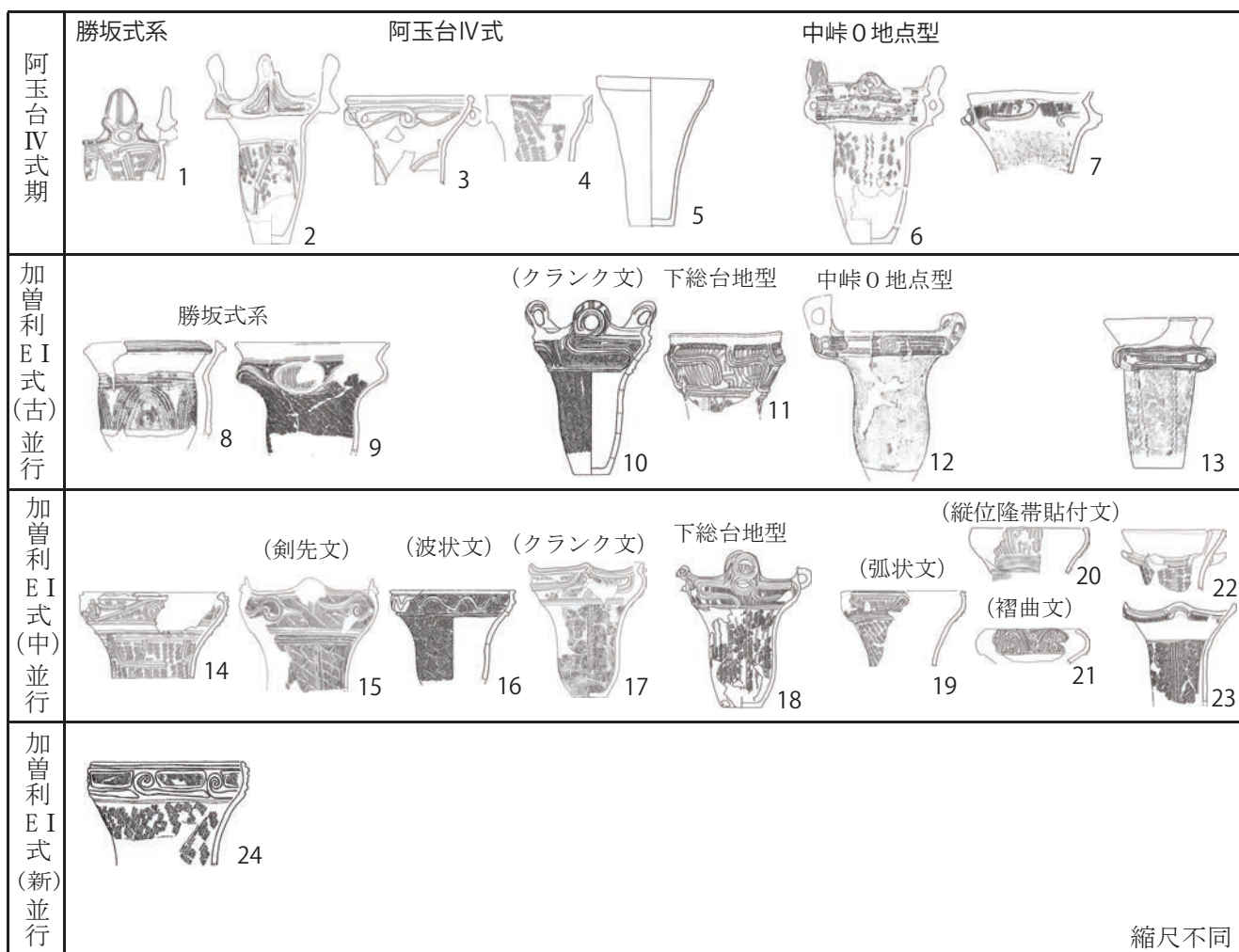
(4) 鬼怒川中流域・小貝川上流域 (土器図版は第5図)

阿玉台IV式期は、阿玉台IV式土器(1～4)と中峠O地点型(5)が伴う。勝坂式系土器(7)や大木式系土器(9)も存在する。

加曽利E I式古段階は、口頸部の一帯の施文域に、貼付隆帯によるS字文(11)、クランク文、波状文(13)等を配す土器がある。中峠O地点型(16)や下総台地型(14・15)も比較的安定した存在である。中空突起が付く大木式系の土器(20)や、勝坂式系土器(19)も少数存在する。

加曽利E I式中段階は、口頸部の一帯の施文域に、沈線が沿う隆帯でS字文(22)、クランク文(23)、波状文(24)を配す土器が存在する。下総台地型の加曽利E式土器(25)は比較的安定的な存在である。東関東に多い良文B地点型(26)や朝顔形に開く土器(27)と、浄法寺類型(30)や大木8b式類似土器(29)もある。

加曽利E I式新段階は、口頸部文様帯に渦巻文と区画文を交互に配す土器(31～33)に代表される。



縮尺不同

1・3・4・14・19・21・22：前田村遺跡 2・6：陸平貝塚 5・7：下広岡遺跡 8・11～13：西原遺跡
9・15・18・23：中台遺跡 10・16：東台遺跡 17・20：赤弥堂遺跡 24：六十原遺跡

第6図 鬼怒川・小貝川下流域の縄文時代中期中葉の土器群

(5) 鬼怒川・小貝川下流域 (土器図版は第6図)

阿玉台IV式期は、阿玉台IV式土器(2～5)に、中峠0地点型(6)、勝坂式系土器(1)が伴う。

加曽利E I式古段階は、貼付隆帯によるクランク文を配す土器(10)、下総台地型の加曽利E I式土器(11)と、中峠0地点型(12)や勝坂式系土器(8・9)が主体を占める。中峠6次1住型はあまり多くない。

加曽利E I式中段階は、口頸部の一帯の施文域を縄文地とし、沈線が沿う隆帯で、S字文(14)、クランク文(17)、波状文(16)を配す土器が存在する。東関東地方に多い浅顔形に開く土器(23)や縦位隆帯状貼付文の土器(20)がみられる。

加曽利E I式新段階は、口頸部の一帯の施文域に渦巻文と区画文を交互に配す土器(24)に代表される。

なお、鬼怒川・小貝川流域では、那珂川流域のような明瞭な土器の地域差はみられない。上流域ほど大木式系土器が多く、下流域ほど中峠0地点型土器や下総台地型の加曽利E式土器が多いという傾向が指摘できる。但し、火炎系土器や浄法寺類型が茨城県側で激減する点は那珂川流域とほぼ同じである。

5 問題の所在

(1) 加曽利E式期への阿玉台式の残存

前述したように、演者は、加曽利E I 式古段階を把握するにあたり、阿玉台式の消滅を一つの根拠としてきた。江原英は、寺野東遺跡第 333 号土坑出土土器を分析し、加曽利E式成立後の阿玉台式の存続を指摘した（江原 2006）。阿玉台式と加曽利E I 式古段階の土器の共伴はその後事例が増え、的確な指摘であったことがうかがえる。一方で、阿玉台式を伴わない加曽利E I 式古段階の一括遺物も多い。阿玉台式は加曽利E I 式古段階に残存するものの、安定した存在ではなかったと考えている。そして、那珂川上流域では、加曽利E I 式古段階を代表する浄法寺類型と阿玉台式の共伴例はほぼ存在しない。

(2) 山内清男による「最も古い部分」との対比

山内清男は、『日本先史土器図譜』に、加曽利E式の「最も古い部分」として、陸平貝塚と土浦近傍から出土した口頸部の施文域に沈線を沿わせない貼付隆帯で波状文を配す土器を掲載した（山内 1940）。後者は、突起と連携する背の高い隆帯に画された口縁部の無文帯を持つ。かつて演者は、この無文帯が、沈線が沿う隆帯施文の土器に多いことから、加曽利E I 式中段階の特徴と捉えた（塚本 1997）。これまで演者が「加曽利E I 式古段階」と捉えてきた土器群の大部分は、山内の「最も古い部分」よりも古いことになる。今後、この時期を扱う場合には、山内の「最も古い部分」との関係を明確にしていく必要がある。

一方、山内の「最も古い部分」以前に、口頸部に一帯の施文域を設け、沈線を沿わせない貼付隆帯による文様を配す土器が出現し、阿玉台式がほぼ消滅していたことが確認できたことになる。

(3) 加曽利E I 式古段階の細分

前述したように、演者の「加曽利E I 式古段階」は、山内の「最も古い部分」よりかなり年代幅がある。近年、この時期を細分する研究がみられる。細田勝は「E I 最古段階」を設定し（細田 2008）、西川博孝は、縄文時代中期の大規模集落、小山台遺跡の報文で、「小山台 (23) SI001 型深鉢」を類別し、1 段階設定した（西川 2019）。かつて、阿玉台IV式と加曽利E I 式古段階の間に、那珂川上流域で浅香内 8H 遺跡 F. 6 出土土器、那珂川下流域で宮後遺跡第 321 号土坑出土土器を位置付ける試みをした（塚本 2019）。現時点では、浅香内 8H 遺跡 F. 6 例は見直しを考えており、宮後第 321 号土坑例はその後の類例を待っている。前後の段階と明瞭な区別ができる良好な一括遺物の複数例の確認と福島県域を含めた大木式系土器編年との対比の見通しを立てたうえで細分を行いたい。

なお、西川が抽出した「小山台 (23) SI001 型深鉢」（西川 2019）の細い隆帯による文様表出は、那珂川下流域の宮後遺跡の波状文やクランク文の土器と共通する。この細い貼付隆帯を手掛かりとして、那珂川下流域と下総台地、鬼怒川・小貝川下流域を対比しながらの細分を検討する必要がある。

(4) 加曽利E式土器成立への大木 8 a 式の関与

冒頭でふれた加曽利E式成立への大木 8 a 式の関与の問題であるが、今回扱った那珂川流域の加曽利E式直前の土器、すなわち阿玉台IV式期の土器（多くの研究者が大木 8 a 式と呼ぶ土器）からは、加曽利E式は成立しない。代表となるのは那珂川上流域の槻沢型、那珂川中・下流域の坪井上型であるが、これらは、圧縮された口縁部文様を持ち、頸部と胴部の境で施文域を横位に区画する 3 帯構成の土器である（第 2 図

5、第3図4)。キャリパー形を呈し、加曽利 E 式に共通する口頸部に幅広い一帯の文様帯を配す土器群(第2図9、第3図9～14)の祖型とはなり得ない。

加曽利 E 式成立については既にいくつかの指摘がある。大村裕は、「下総台地型」の加曽利 E 式土器にみられる横蕨状文が、常総台地の勝坂 V 式から「中峠 6 次 1 住型深鉢」を経て成立する過程を説明した(大村 1998)。近年、細田勝や西川博孝は、栃木・茨城北部から福島南部に分布する七郎内 II 群土器の S 字文が、武蔵野台地の勝坂式に受容される過程を説明している(細田 2010、西川 2023)。福島県南部から栃木・茨城の北部の大木式系土器の S 字文(阿玉台 III 式段階)が、加曽利 E 式成立前の関東地方南西部の勝坂式に受容され、加曽利 E 式成立の一つの要因となったことが指摘された。

6 今後の展望

那珂川流域では、阿玉台 IV 式土器や頸部と胴部の境の屈折部で施文域を区画する 3 帯構成の土器群(槻沢型・坪井上型)から口頸部に一帯の広い施文域を配す土器群(加曽利 E 式と共通)に大きく変化する。勝坂式土器の大木式系 S 字文の受容という考え方によって、加曽利 E 式の成立に一つの見通しが立ちつつあるが、阿玉台式終末時の土器群の大きな変化は、福島県域から仙台湾周辺も含めた広域的な現象である。この現象の理解には、各地域で精緻な編年を行い、相互に比較することが必要となる。

参考・引用文献

- 安孫子昭二 1978 「加曽利 E I 式の範型と動坂遺跡の型式」『文京区動坂貝塚』
- 安孫子昭二ほか 1980 「地域別報告(1) 東京・埼玉における中期後半の各段階の様相」『神奈川考古』第 10 号
- 江原英 2006 「阿玉台式土器の伝統と『中峠 O 地点型』の成立(覚書)」『栃木県考古学会誌』第 27 集
- 海老原郁雄 1981 「加曽利 E 式の変遷について」『奈和』第 18 号
- 大村裕 1998 「勝坂 V 式・阿玉台 IV 式から加曽利 E 式への転換期の諸問題」『下総考古学』15
- 谷井彪ほか 1982 「縄文中期土器群の再編」『研究紀要』1982 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 塚本師也 1997 『栃木県埋蔵文化財調査報告第 196 集 浄法寺遺跡』
- 塚本師也 2010 「鬼怒川・小貝川流域の加曽利 E I 式期の土器―旧関根町西原遺跡第 61 号住居跡出土土器の位置付け―」『茨城県考古学協会誌』第 22 号
- 塚本師也 2016 「那珂川流域の加曽利 E I 式初現期の地域差」『研究紀要』第 24 号 公益財団法人とちぎみらいづくり財団埋蔵文化財センター
- 塚本師也 2019 「栃木県北部における縄文時代中期前～中葉の土器編年」『研究紀要』第 27 号 公益財団法人とちぎみらいづくり財団埋蔵文化財センター
- 塚本師也 2019 「阿玉台 IV 式期から加曽利 E I 式古段階の土器様相―那珂川流域と鬼怒川・小貝川流域との対比―」『考古学の地平』II
- 西川博孝 2019 『千葉県教育振興財団調査報告第 77 集 柏北部東地区 埋蔵文化財発掘調査報告書 15 ―柏市小山台遺跡 B 区―』
- 西川博孝 2023 「台耕地型深鉢小考」『土肥孝追悼論集 煙草と縄紋と考古学』
- 細田勝 2008 「加曽利 E 式土器」『総覧 縄文土器』
- 細田勝 2010 「勝坂式の変容と大木式の関係(素描)」『比較考古学の新地平』
- 山内清男 1940 「第 IX 輯 加曽利 E 式」『日本先史土器図譜』